
俺ら

トコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺ら

【Nコード】

N4597Y

【作者名】

トコ

【あらすじ】

ちよつとした事情で屋上にたむろっていたオレらの前に人が落ちてきた。「は？異世界トリップ？？式？？」よくわからねえが、退屈からは抜け出せそうだよ。

俺らと異世界人

あいつとてそこまではするまい、と考えながらも容疑者はあいつしか考えられなかった。俺は階段をひとつ飛ばして駆け上がりたくなる衝動を抑えながら登りきり、屋上の鍵を開ける。

扉を開けると春の柔らかな光が差した。うす雲の掛かった空に仄かに桜が香っている。

「よお」

「あつ、御鏡先輩」

先に来ていた二人が振り返る。俺もまた、いつものように声を掛けた。

「ごきげんよう」

* * *

俺は、御鏡葉月。中三で14歳女性だ。声に出すときの一人称は“私”だが、考えている時や素では“俺”になる。俺は今、ある事情により多くの人間を騙しながら性格をしており、その弊害で学校では普通に話す人間、つまりは友達というものだが、友達を作ることができない。

ではこの人たちは何だつて？

目の前の二人を見る。いそいそと俺用のクッションを持ってくる綾に、ニヤニヤ笑いながら話しかけてくる柚羅。

「なあ、この学校で怪奇現象が起きるって話聞いたか??」

「いやー!! 止めてください」

怖がりの綾が丸くなって耳を塞ぐのが面白いのだろう、柚羅はよくこういった話題を振る。

しかし今回ばかりは俺も仲裁に入るつもりがない。柚羅の話に乗る。後ろで綾が恨み言を呟いた。

「その件について理事長直々に注意されたよ。性質の悪い悪戯をするようなら屋上を閉めることもできるそうだ」

「はあ！？オレらのせいだよ！誰がソファーなんか落とすかつつの。大体壊れたの校門だろ？あそこまで届くはずねえから騒がれてんだろ？？校庭越えんだぜ？」

「何か対応をとらなければいいわけも通じないでしょう？おそらくは・・・人身共犠でしょうけど。本来立ち入り禁止のはずの屋上に一部の生徒が入り込んでいるようでは、学校側の管理責任が問われるのは必至。けれどももっと大きなこと、落ちるはずのない場所に落ちてきた家具とかね？そういった事に対する不安の解消にはなるから」

「うわ汚ねー！・・・待てよ、そんなら学校側は怪奇現象の正体が分かってんのか？」

「さあ。分かっているならそんな回りくどいことをしないのではないかとは思っけれど、はつきりとしたことは言えないわ。何かを隠したいのなら噂を利用すればいいだけですからね」

つまり、ホンモノの怪奇現象ではないかということ。全く、何故そんなものに俺達の場所を取り上げられなければならないのだろっ。

「おっさんイイ性格してやがんなあ。どう転んでも損しねえじゃん。あゝ・・・つつてもやるつきやねえか。おい、綾！綾！耳塞ぐな！！！」

「いやー！！そんな話聞きたくないですー！！さいてー意地悪馬鹿どてかぼちゃー！！！！」

最後はもうワケが分からない。しかし思い思いに話す声はにぎやかで、楽しい。それは学校ではとてもよくある光景。

しかしこの“屋上”は、学校ではない。

「一応聞いて、綾。ここの鍵を取り上げられるかもしれないから」

「え？なんですか？？」

「オレ達を怪談の犯人だと思ってんだろ？・・・つうか、ホントお前知らねえの？すげえ噂じゃん」

柚羅が呆れたように言うと、綾は胸を張って応えた。

「そんなのっ！怖い雰囲気になったら耳を塞いだに決まってるじゃないですか！！」

「阿呆かつ！？だからその怪談つてのが・・・」

「きゃー！やだヤダ柚羅さんの意地悪！！！！」

「だから知らないきゃ話がすすまねえだろ。ほれほれ教えてください
柚羅様とか言えよ。知らねえのお前だけだぞ」

「いーやーでーすー！！！！」

くすっ

笑ってしまった。漫才をしている場合ではないと知りつつも、今の幸せに身を委ねてしまいたくなる。

「綾、頼みたいことがあるのだけれど」

さりとして思いに流されるわけにもいかない。綾を説得することにした。

「なんですかつ。御鏡先輩の役に立てることがあるなら不肖この鎧綾乃喻え火の中水の中」

「敷地内で不審な落下物が確認される事例が多発しているの。調べてみてくれないかな？」

「そんなの柚羅さんがやってるんじゃないですか？屋上にいるのが暇で物投げたとか・・・ってもしかしてそれが幽霊の仕業ですか！？」

ようやく話された内容が怪奇現象だと分かったらしい。顔色が変わる。

「気付くの遅せーよ」

「うつつ・・・馬鹿な悪戯してる柚羅さんなんか言われたくないです！さっさと止めてくださいよめーわくです」

柚羅のもつともなツツコミをものともせず、言い募る。完全に犯

人扱いだ。

「だからオレじゃねって・・・」

「たとえ柚羅が犯人だとしても、私たち以外の誰かを犯人として捕まえないければ屋上の鍵は没収なの。頑張って探しましょう」

柚羅の発言をさらりと無視して綾の手をとる。綾の顔が真っ赤になった。

「はいっ！！頑張りましょう！！」

張り切って声を上げる綾を尻目に柚羅が囁いた。

「誑しめ」

「やるつきやねえ」と言ったのはどちら様でしょうね。それとも

“俺ら”に綾は入っていないとも言うつもり？」

「褒めてんだよ。大したお手並みだ。 テキトーに頑張ろうぜ」

「・・・そうだね、適当に頑張りましょう」

からかい混じりに窘められ、余裕がなくなっていたことに気付く。悪い噂が目立つ柚羅だが、決して馬鹿ではない事が時折見せる鋭い言葉に表れる。屋上登校なんて勿体無い。

「コードネームは『怪奇・空から降ってくる椅子』な」

「は！？」

「ださっ！！」

「ださいっつったのはこの口か？」

本音がこぼれた口が引つ張られ、大きくなる。綾もなんと云うべきか・・・雉も鳴かずば撃たれまいに。

「ほんひよのほほへふー」

「綾もこう言ってることだし、本決まりで。」

「・・・仕事名などいらないと思わない？」

俺もやんわりと反対するが、これが逆効果だった。

「よしそんじゃあ今からコードネーム『怪奇・空から降ってくる椅子』開始だあー！！」

大声で宣言する。どうやら本決まりになってしまったらしい。

かくして俺らによる『怪奇・空から降ってくる椅子』原因追求が始

まった。

* * *

えーん。お化けとか、幽霊とか、怪奇現象って駄目なのに。てゆーか柚羅さんの差し金じゃないんですか!?

とか考えながら噂を集める私ってちよつと健気ですか? な〜んて。柚羅さんも、御鏡先輩も学校の中じゃ表立った動きができないツポイので自然にこうなるんですけどね。

ええと。自己紹介がまだでしたっけ? 私は鎡綾乃、14歳の力ガ中2年生です。現在憧れの御鏡先輩の追っかけから友達に昇格しました!!(多分) 柚羅さんより下っぽいのが気になりますけど、これが上手くいけば親友に昇格かもなのです。がんばるぞー!

ということ。学校で一番仲がいい、そして私に怖い話をしようとした由宇崎さんに話を聞くために声を掛け・・・ようと思うんですけど、やっぱり怖いですっ。

ガタガタしていると、挙動不審な私に気付いたのか由宇崎さんが声を掛けてくれました。私は後に引けない思いで切り出します。

「ゆ・・・ゆう由宇崎ささんっ、さっきのおはお話っ・・・きかせて・・・」

「あれ? 綾乃ちゃん、どうしたの? さっきはあんなに怖がってたのに。まあ面白くていいけど」

面白いつて・・・っ!!

こっちは本気で怖いっていうのにこの言い方。言葉を飾らないのが由宇崎さんのいい所だけど、こんな時はちよっぴり凹みます。

「あははっ。やっぱり綾乃ちゃん面白いわ。で、なんなの? 麗しの御鏡先輩にでも頼まれた?」

なんで分かるんだろっ? と目をぱちぱちさせていると、また笑

ってバシバシ肩を叩いてきた。

「うはは分かりまくりっ。どうせなら同じ御鏡でも紫苑先輩に目をつければいいのに、物好きだねえ。紫苑先輩は優しくて御鏡家の跡継ぎで一番重要なことに、男なのに。同じ御鏡家でも葉月先輩じゃ玉の輿とは行かないモンね」

「玉の輿ってありえないですよ会ったこともないのに。ほとんど学校に来ていないし、来ても黒山の中心ですもん。あの山の中に入っていくことを考えたら玉の輿なんてのしつけて送り返します」

「ふうん・・・」

あ。言い過ぎました。

由宇崎さんは一言も言わないけど、なんとなく分かる。彼女は紫苑先輩が好きなんです。それで紫苑先輩とそっくりらしい、従姉弟の御鏡先輩に対してはちよつとキツいんですね。だからどうして私が御鏡先輩の追っかけをしているのか解らなくて、でもライバルにならなくて良かったって気持ちもちよつとあるみたいで。これで私が紫苑先輩をフォローするとそれはそれで不安そうにするので、普段は軽く流してるのに、今回は失敗しました。恋する女の子って不思議です。

「ところで怪奇現象なんだけどさ」

「はあうううっ!!」

そっだ、元々その話を聞くために由宇崎さんに話し掛けたんだっけ!!!!!!

「こら。ここまで来て往生際が悪いぞ。愛しの葉月先輩のためだろ!!」

誤解を招くような言い方は止めてくださいとか葉月先輩なんて馴れ馴れしいですよとか言いたいコトはたくさんあるんですけど、目の前に迫った恐怖に言葉が出ない私を許してください。

「こ、ここじゃないはずですよね・・・」

半泣きになりながら由宇崎さんに噂を教えてもらって、変な物が落ちたという場所に行く途中の私。ちなみに一人。

由宇崎さんは、散々色んな噂を聞かせて怖がらせた後“じゃあ御鏡先輩のためにがんばんなよ”とか言って付いてきてくれませんでした。半ば当てにしていただけに怖さも倍増です。

「うう・・・御鏡先輩のためだもん」

最強の呪文を唱えても、ここから立ち去らないでいるくらいの勇氣しか出てこなく・・・

なにが落ちてきたらこんな穴が開くんですかぁ!!

ガタガタ震えながら考えるのが精一杯です。

焦げたような穴と、明らかに血みたいな匂いの残る染みを見てどうしろって言うんですか。うわーん。

そういえばさっき地響きっぽい音がしたんですよえ。ふふふ・・・

・ってことはでこれって出来立てはやほやの怪奇現象？私発見者一号さんですか??

いやっ。そそそんなのやですっ!!

最強の呪文の効果は化け物より弱いみたいで。とりあえず誰かを呼びに行こうと後ろを振り向こうとした私の目の端に何かが映って

* * *

オレってさ、ぶつちやけ引き籠もり？みてえな。半分以上屋上登校だからな。

その屋上登校も一年半以上続けられ、それなりに人脈ってモノが

出来上がる。各学年で担任となつて苦労した奴ら、補習を認めさせるために賭け事をした奴・認めさせた奴、人生相談を申し出た奴つてな。プラス近所の食事処なんて、結構楽しくやつてる。

ああ、自己紹介が遅れたか。オレは神薙柚羅。この春中三になつた受験生つてトコロか。ま、伊達にこんなトコにいるわけじゃねえし、勉強の方は問題ねえんだけど。こんなトコにいるんで内申はボロボロなんだよなあ。

今日も知り合いのセンコーントコ行ったら様子が変だよ？聞き出してみやあ面白いことになつてるじゃねえの。暇だし現場廻りでもしよつかなくなんて考えてたら、俺のせい？みてえな。

まあ、葉月が余裕そうだったんでホントに疑われてるわけじゃねえんだろうけど。確かに考えてみやあ日頃から屋上に入り浸ってるオレが一番怪しい。

てなわけで、落ちた物や場所なんかを詳しく聞いてみたわけよ。

「ん」。確かにオレでも無理だなー」

始めに聞いた時と同じセリフ。正門にカウチだろ、その時点で無理だ。けど他にも落ちてて、それが校外だったりもするんだ。動物が死んでもあつて、それもすごい高さから落ちてぺっしゅんこになっているとかさ。信憑性のあるものだけでも犬に魚に馬。・・・つか馬なんてどっから持つてくるんだよ。

まあなあ、とりあえずモノホンの怪奇現象つてヤツであることはわかる。んで、重い物ほど校舎の付近に落ちてる。確かにオレを疑いたくもなるだろう。

けどな。

オレは一番近くに落ちたと思われる石像の付近の柵を見る。屋上には普段から鍵が掛かっていて、オレ達のように鍵を持っていないければ入ることはできねえんだが、それでも俺の背より高いフェンスが屋上を囲んでいた。そいつはゆうに2メートル以上あり、高速に自転車を落とすなんてレベルじゃねえ。馬や石像を落とすなんてコトできるはずもなく、そもそもんなモンどこから調達してくるんだ

って話がひとつ。

重さと落ちている距離に相関係数が見られるのは確かだが、重さと重力を考慮すりゃあ屋上から落としたんじゃ高さが足りな過ぎるのが丸わかりってのがひとつ。これは理科の高峰も言っていたから確実だ。まあ、常識で考えて自転車置き場向こうのプールサイドにベッドを落とすにや四階分の高さじゃ足りんだろ。

そしてまあ、最後に。

オレははしごを上り、貯水タンクに引っかかっていた布キレを掴む。先ほど石像落下地点を見たときに気付いたのだ。

そこはオレ達もあまり気付かない場所だが、いくらなんでもこんなものがひらひらしていりゃあ一両日中には気付く。昨日葉月と点検したときには確かに無かったんだ。

しかし、屋上より上からモノが降ってるって解った所だからどうした？ なんだけだな。これから落ちてくることを止めなきゃオレ達の肩身は狭いばかりだ。

はあー

大きいため息を吐いて空を睨む。

「

どおおおん

空気が震えた。特撮の特殊効果みてえな炎が天空に見える。そして、炎の中から何かが落ちた。それは学校の敷地ギリギリって所へ落ちてゆく。オレはそこへ向かおうとして・・・

「わあっ」

「柚羅！？ 今のは・・・」

ダンッ

最後の物音は背後で聞こえて、葉月と顔と見合わせる。

「人が」

「降ってきた！！」

その驚きはオレからもうひとつの落し物を忘れさせるには十分なインパクトを持っていた。オレ達は落ちてきた人間のそばに駆け寄

る。

男からは異臭がした。血と髪の毛の焦げるにおいが混じってるんだろ。服は血で汚れているし、どっから落ちてきたのか知んねえケドコンクリートの床に叩きつけられたんだ、医者が必要だろう。とりあえずは保健室か？こいつを運ぶのは面倒そうだし、呼んでくればいいか。

「待つて。馬鹿なことをしないで」

再び階段へ向かった俺を葉月が止める。

「関係者以外立ち入り禁止、どこの学校にもある注意書きよ。こんな不審人物を連れ込んでいたとでも言うつもり？」

「でも！怪我してるだろ！？」

「どうせそんな男はいなかったことになる。なら、わざわざ学校側に知らせる必要はないでしょう。薬を借りてくるわ」

関係者がどうかなんてわかんねえって。というオレの突っ込みを無視して葉月は階段を下りてゆく。オレはひとつ息を吐くと今までのように気にしないことに決めた。

* * *

叔父には気付かれたくない。保健室へ向かいながら考えるのはただそれだけだった。

現在、叔父とは一蓮托生になっているが、俺が紫苑を演じて周りを誤魔化せているということは叔父にとって脅威のはず。紫苑が目覚めれば俺の身は以前にまして危険になることが予想される。それまでに弱みを握っておきたい。

嫌な人間だな、俺も。

それでもいつ起きるか分からない紫苑が起きた後のことも考えなければならぬのだ。自分と大切な人を守るために。

保健室は取り込み中だった。

「失礼しま・・・お取り込み中のようですね」

鍵もかけずに戯れている人影を見て脳にメモする。 “ 英語の米田と保健の野堯は恋仲 ”

「やつ・・・別にそういうわけじゃあ！！」

「そうよ。何か用かしら？」

逆の答えが全く同時に返り、二人が顔を見合わせる。

「なななんてコトを・・・」

抗議する野堯の顔は真っ赤。俺は脳のメモを訂正した。 “ おそろくは火遊び ”

「私のことはどうぞお気になさらないで下さい。怪我人が出たので消毒液等借りますね」

「もしかして鎧さんかい？行こうか？」

「いえ。それには及びません。本人が自分でできると言っていますから。それでは失礼します」

扉を閉めたとたんに背後で「ぜぜ絶対誤解されましたよ！！！！」と声がした。わざわざドアを閉めた後に声を出すなら音量を考えると言いたい。これでは誤解しようにも誤解できないだろう。

とにかく、首尾よく薬品を手に入れた俺は屋上へ戻る。

「これ、ほとんど返り血だぜ」

脱脂綿に消毒液を浸しながら感心したように声を上げる柚羅。俺は柚羅の手際のよさに呆れた。一体どんな生活したらこれほど手際よく治療ができるようになるのだろう。

「うーん。こりゃあほとんど無傷だぜ。髪の一部と足をちびつと火傷して腕に小さな切り傷があるだけ。派手な音した割にたんこぶもそんなでもねえし」

「奇妙ですね。空から落ちたらたんこぶでは済まないのではないでしょうか？」

「まず無理だな。その辺は起きたら聞くなってことにしようぜ」

まあ、それが妥当だろう。

「・・・何してんだ？」

「一応、危険人物だと困るでしょう」

保健室から着服してきた包帯で男を縛る俺に、柚羅が問いかける。・・・しかし、包帯というのは伸びてしまうので縛るには向かないな。などと考えながら所持している刃物を没収する。大小合わせて片手に満ちるほどの刃物を所持しているなんて危険この上ない。何も聞かずに始末してしまいたいほどだ。

しばらくしても男は目を覚まさなかった。段々下校時刻が迫ってくるが、ここへ置いて帰るのでは不安だ。下校時刻までにこの人間をどうにかしなくてはならない。少しずつ俺達があせり始めたとき「みみみ御鏡せんぱーい！！もうヤダ帰りましようよー！！！！！！」
べちゃ

丁度茶を飲んでいた俺は綾の突進を避ける。男に足をとられた綾が無様な音を立てて転んだ。

「うつ・・・誰ですかこんなトコに・・・人？誰ですか？？」

警戒心を頭に俺の背後に隠れる。忙しい奴だ。

「この人・・・なんか嫌です。御鏡先輩の彼氏じゃないですよね？」

「はあ！？どこからそんな発想が出るのかしら？？」

驚いて口調がおかしくなる。突然何を言い出すんだろう。

「ですよねこんな気味悪い人。じゃあ、さっさと追い出しましょう」「をい」

柚羅が突っ込んだ。“葉月”としてはノリ良く突っ込んだりはできないので、柚羅の反応は心地いい。

「勝手に決めんなアホ。よくわかんねえケド、一応怪我人だぞ」

「でも・・・」

「リチャード！！」

がばりと男が跳ね起きた。綾の一撃が効いたのだろう、腕にうつすら痣が見える。

「喧嘩する必要はなくなったようですね。こんにちは、私は御鏡葉月と申します」

「そんなことよりリチャードを見なかったか！？俺と同じように落

ちてきたはずだ」

「ここには貴方だけです」

わざと含みを持たせて言う。・・・これで勝手に勘違いしてくれればしめたもののだが、そう上手くはいかないかな。

そういえば、この男が落ちてきたと思われる振動の直前にもすごい音がした。おそらくアレだろう。

しかし、屋上に落ちていなかったということは亡くなっている可能性のほうかはるかに高い。何やら事情がありそうだが、どうにか面倒にならずに話を聞き出せないだろうか。

「ならどこに・・・」

「知りませんよ。大方どっかに落ちてるんじゃないですか」

俺の思惑をあっさり無駄にした。綾にとつては興味より煩わしさが先にたつらしい。・・・せつかくの情報源が

「そうか。・・・失礼した」

「ちょ・・・」

ストップをかける暇も無く、男は颯爽と屋上を出て行った。・・・話を聞く暇もあったものじゃない。

「名前も拝聴してないのですが」

俺の弦きも空しく下校時刻になっても男は帰ってくる様子を見せず、俺達は本日一日の苦労を思いながら帰途に着いた。

* * *

一夜明けて。オレがいつものように屋上登校すると、昨日見た男がいた。

「よう。知り合いは・・・見つかなかったみてえだな」
纏っているオーラが明らかにそうだもんなあ。

「必ず・・・遺志を・・・」

独り言とか呟いちゃってるし。あー・・・つか、そいやー。

「お前どうやって入ってきたんだ？」

鍵が掛かっているはずの屋上を思い出す。空から落ちてきたことといい、不審とか言うレベルを超えてるだろ。

「ひとつ訊いてもよいか・・・？ここは楽園だろう？」

「あ・・・いや」

楽園ってどつかのパブ？なんて冗談を言える雰囲気じゃねえ。しかしどう考えても楽園なんてモンに心当たりはない。

「星を訊いているなら地球で、国名は日本。臥丘って地名だ。あんたが何を指して楽園と言ってるんのわかんねえよ。なんで落ちてきたのかもな」

「共栄の者だ。この世界は楽園か？」

「・・・・・・・・」

「違うのか？」

いや、世界とか言われましても。

オレの沈黙を否定と取ったのか、男が聞き返してくる。・・・今はじめて知ったんだけどよ、神様って奴は“光よあれ”って言った瞬間に闇を作り出したんだな。オレ達は、相対的にしか物事が見れないのかもしれない。

「この世界にどんな名前が付いてるのかなんてオレは知らねえ。他の世界なんてモノが認識されていねえから、この世界に名前をつけて区別する必要がねえんだよ。つーとあんたは、他の世界から来たとか言うんだな？」

それなら空から落ちてきた事だって納得ですよ。

あー、つ

うか、全てが常識やら理解の範疇から外れていることに納得？このままじゃ本当に屋上閉鎖だな・・・

「ここが楽園ならな。・・・状況を見る限りでは当たりだろうが、本当にこれで・・・トワイカラー」

「ん・・・？」

奇妙な気分がして目を瞬く。俺の目の前で雲が発生した。

「やはりそうか？・・・ああ。疲れているのかもしれない・・・だが、伝説は間違っていたようだな。こんな事でリチャードを失うなんて・・・」

あー・・・見つかったけど、亡くなったのか。そりゃあ落ち込むわ。

にしても、雲としゃべる人間。自称異世界人なんて変なのが当然かもしんねえが、こりゃあどうみても通報モンだよなあ。

オレの目線に気付いたらしい。男が言った。

「俺は式使なんだ、気にしないでくれ」

「式使？その雲が？」

「雲？そんなもの・・・トワイカラーが見えるのか！？それではあの式は・・・はあ！？・・・確かに、しかしそれは修行を経てだ。こんな所では・・・なるほど」

いや。だからオレ置いてけぼりなんスけど。雲の言ってることも聞こえないし。独り言はちいせえ声で言え！！

「・・・それしかない、か」

だから何が。

もう突っ込む気力も起きず、心の中でのみ一人ごちる。だって話振っついて丸無視なんだぞ。こっちの訊いてることには答えねえし。グレルだろ？

「柚羅、昨日の話だけれど・・・」

扉を開けて入ってきた二人が固まる。オレの方もこんな朝っぱらから二人が来ると思っていなかったので驚いた。

「あー！昨日の人！なんでまた居るんですか？やっぱり柚羅さんが連れ込・・・」

「人聞きの悪いコト言っくな！！しょうもねえ噂に乗せられやがってこいつは異世界から来た人間なんだよ」

「本気ですか？ばっかみたい」

・・・確かに突然こいつは異世界から来た人間だとか言われりやあ信じる人間は少なえだろうけど。綾に馬鹿にされると妙にムカつ

く。

しかし、考えてみると綾はこの男が空から落ちてきたことすら知らないわけで。勝手に屋上に居る（多分オレが引き入れたと誤解されている）人間だとしか・・・うわぁオレ立場ねえなあ。

とりあえず綾に事の次第を説明しようとする、突如綾が悲鳴を上げた。

「え？え？？嫌ぁ！！みみみ御鏡先輩っ助けて下さいお化けがー！！！！」

一目散に葉月の背中（定位置）に行くと、いつもの如く丸くなつて震えだした。

「きゃー！！しゃべるなバカバカ！神様！悪魔が居ます助けて下さいー」

「こらっ、大人気ないぞ。彼女は何も知らないようだから多めに見てやってくれ。・・・そう、俺よりはるかに大人なのだろう？」

「来ないで・・・来ないで下さいっ！！そんなの見えない。居ないんだから！！！！」

雲がゆらりと揺れ、綾へ近付く。あー・・・こいつのことね。確かに幽霊に見えなくもねえかな。

「おい、綾。あれは式使っつーらしいぜ」

「あれ・・・？綾も柚羅も何を言っているの？」

綾がお化けとか悪魔と呼んでいるものが何か気付いたオレはいつもの調子を取り戻すが、葉月は不思議顔だ。

「だからさ、あの雲だよ」

「あつあのチマチヨゴリの女の子です」

「だからどこに？」

「「??？」」

俺達は顔を見合わせ・・・

「「どういうこと（だ）！？男！！」」

「お化けー！！？」

一人阿呆なコト言っただが無視。さらにオレと葉月は唱和する。

「「後説明の前に名乗れ（立場をうかがいたい）」」

「・・・相模だ。相模宗谷」

質問と答えが同時に発せられた。男の方も男々と連呼されるのは嫌だったらしい。

「式は式使にしか見えない。式を見ることができ、式と契約できるものが式使だ。通常は何年も修行して式を見えるようにするのだ。見え方に差があつて当然だろう」

いや、だろつとか言われてもな？お前のトコじゃ普通かもしれないねケドこつちじゃンなこといやぁ頭に花が咲いてると思われろぜ？
「式には何か利点がある？ただ幽霊が見えるだけなの？」

あら？葉月が食いついた。こいつ空想小説馬鹿にしてなかったか？一時期陰陽師とか流行つた時にその話をしたら心底どうでもよさそうに流してた癖に。

「いいや。もちろん能力があるが・・・何故そんなことを？君たちには見えているのだろう？ここは楽園なのだろう？？」

「そこが問題なんだよ。相模の言う楽園つーモンとオレ達の世界にはでっけえ隔たりがあるように思えんだよな。あんたは“楽園”をどんな所だと思つてきたんだ？」

「最強の式使になれるところだと聞いていた。実際は違つようだが・・・そうでなければ、誰があんなむざむざとつ・・・！！」

「そんなのどうでもいいんです！！早くトワイカラーを連れて出てつてください！！私は何もできない人間でいいんですから！！」

錯乱状態で綾が叫ぶ。

「ユーレイの手ほどきなんてやだぁ・・・ぎゃー近寄らないで触らないで下さい死ぬー！！」

むちゃくちゃ楽しそう。・・・いいなあ。

雲と戯れている綾を見てひとつ息を吐く。綾が本気で嫌がつているのは分かるんだが、真面目な話をしてるのに緊張感にけるんだよなあ。この叫び声。

「まあ、伝説なんてそんなものだろう。ところで、その式とい

うものは私たちにも扱えるものなのですか？」

「式が見えるのなら簡単だ、後は契約すればいいだけだから」

「そんなのこめんです！！」

「声をそろえるな」

「ここは私だけです！！・・・きゃあっ」

急に水が降ってきて綾が声を上げる。なるほど、と小さく葉月が呟いた。あれが式の力なのね。

「見えない人間にはホントに怪奇現象だな。見える奴にとっちゃあ幽霊の仕業らしいけど。な、葉月」

「だね。修行か、何をするのかしら」

「俺に打たれるとかな？これから楽しくなりそうだな」

「ちよつと待つてください。なんか今耳がおかしくなったんですけど。・・・水が耳にでも入ったってことは・・・」

『気のせいだろう』

「イヤー！！」

朝の清々しい空気の中に綾の声が消える。うん、まあ当然綾の意向が通るはずは無く。

こうして屋上に新しい仲間が一人増えたんだよな。

* * *

ああ・・・嫌だって・・・イヤだって言ったのに！！

どーして私ってこうなんでしょう？なんかすごくごく御鏡先輩に弱くないですか？？分かってて押し付けるなんてサイテーですよ。お。

「ただいま」

誰もいない家に言う。これはもう、習慣のようなもので。歪んでくただけだっただけなのは知ってるんですけど。

「ここですよー。ホントにもう、冗談じゃないですよー」

幽霊にとり付かれてる変な人だと思ってたら、なんですか？異世界の人ってどーゆーことですか！？

ああもうしかも幽霊が見たいってどうゆうことなんですか！！

「ああもうさいって・・・」

ドコッ

「いったーい。ああもう家に来たんですから消滅してくださいー」

物をぶつけてきた幽霊に哀願する。この幽霊は、名前で呼ばないと怒るし男の人のことを蔑ろにすると怒るし、総じて沸点低いし。なんかもう、ここまで尊大だと怖がつてる暇とかない感じになります。

神の名も全然効かないし、私にできるのって言うこときくだけなのかもしれないですけど・・・考えてたら切なくなってきました。

相模さんを押し込めるのはどの部屋にしましょう？と、日本人感覚では無駄に広い3LDKの家を見わたします。いつでも追い出せるように玄関の横の部屋かな？

客用のベッドに布団を置き、軽く掃除をする。大抵休日に掃除しているからそんなに汚れてないんですけど、気持ちの問題っていうか、そこで喚いている幽霊の問題っていうか。

一人暮らしだからいいものの、お二人は私には家族が居ると思っ
ているはずなのにこういう常識なんでしょう・・・家族が一緒だ
ったら何が何でも首を縦に振らなかつただろうっていうのはともか
く。これで相模さんがここに居る準備ができちゃったのです。

異世界の人、らしいのにね。

昨日見た光景を思い出しながら笑う。焦げた大地。突き出ている
氷の柱と、そこに引っかかっている焼けた何か。

それが引っかかっている所だけ氷が溶けかけていて目が離せなく
て。

あんなことをする人は人とはいわないですよ。少なくとも、私
の周りの人にはいない。普通でいたいんです。

必死で逃げ出したけど、目に焼きついてるんです。あの腕が異世界の人の最期なんじゃないですか？そして異世界の人に関わった私たちの・・・

でも言えないのです。御鏡先輩が望むから。

本当の本当に御鏡先輩が望むなら、私は止められないんです。なんかね、こうホントの御鏡先輩だーって時はドキツとするんですよ。強くてかつこよくて危なくて優しくて綺麗なんです。そうゆうときは何言ってるのかわかんなくて、もう頷くしかないのです。

これからのことってすごく考えたくないんですけど、でも、御鏡先輩が決めたのならそれでいいかなーって。・・・私ってホント駄目かも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4597y/>

俺ら

2011年11月13日03時18分発行